

資 料

一 農地改革後における一山村の 法的生活

——福島縣東白川郡宮本村による——

戒能通孝編

一 序説

昭和二十四年八月末、私と野村教授とは、早大講師杉山晴康氏のほか、名古屋大學助教長谷川正安氏および商大その他の助手、研究生諸君ならびに早大法學部學生諸君十數名の援助を得て、福島縣東白川郡宮本村の實態調査を行った。本調査の主目的の一つには、山村における水利慣行の問題について資料を蒐集することにもあつたのであるが、不幸にしてこの方面に關しては、十分な資料を集めることができなかった。調査課題はそのために自ら全然人に知られないような山村で、農地改革がいかなる影響を與えているかを具體的に調査することに限られざるを得なかつたのである。

資 料

宮本村は、白河からバスで約二時間近く西行し、途中に石川町をすぎ、次第に山間に迫る箇所にある、かなり交通不便の村である。福島縣はいうまでもなく、河野廣中、島田三郎らの自由黨あるいは改進黨國士を産出したところであるが、その全體的な傾向は、山形、秋田に比較してすらも後進的な性格を保存していたところであつた。しかもそのなかで最も山間の一村である宮本村が、舊時代色を濃厚にたたえていて、もっぱらその上に眠つていたことはいうまでもなかつた。ためにこの村では農地改革の一應完成した今日においてすら、昭和二十三年末、村長の改選に際し、村の有力者連中が候補者の協定を相談したところ、現村長はその席でたんかをきり、「自分は君らの援助を受けなくても出馬する、村の有権者三千票のうち、一三七八票は一族縁者關係でとつてみせる」といい、實際にも一〇〇二票まで集め、當選したということだつた。村長が就任するや、村役場は一族を以て固められ、その上に村會が開會せられても、彼自身議長同様にふるまつて、どんな提案を可決させていくわけなので、反村長派の巨頭である村會議長は憤慨し、わざわざ縣廳から講師をよび、地方自治法の講義をしてもらつたが、どうにも齒が立たないといわれて

いるほどである。

福島縣、特に會津地方に關していえば、藤田五郎氏の研究があつて（最近のものとして特に社會構成史體系第五回「近世における農民層の階級分化」、農奴主的な村の支配者からコカタの獨立とその顛落などが論ぜられていられるけれども、短期間の調査によつてこの村の歴史をそのままに把握することはできなかった。その代りに宮本村は、全村の大部分を山林によつて占められ、しかもその七割までを國有林としているところなので、山にいながら私有の山がない典型的な山村として、これを見ることができたのであつた。

以下の記録はもつぱらわれわれが目で見たことと、それから合理的にひきだされるであろう推測とのみを記述する。村には舊家と稱するものが相當にありながら、文獻的研究を試みるに足る程度まで、これを求め得なかつたことは遺憾であるが、それは他の箇所によつて補充するほかないものと思われる。なお本稿のほか、早大法學部學生船本滋、眞鍋誠之助、伊藤友勝の三君が、村の南方にある三株山なる箇所の開拓者團について、大體記事にするに足る程度の報告を書いてくれたことを多とするが、分量の關係上掲載することができなかった。また學生諸君が努力して集めてくれた統計資料に關しても割愛せざるを得なかつたことと、戒能の執筆した竹貫田の記事は、一部分法律時報昭和二十四年十一月號の「官有林地帯」にも流用されていて、若干の重複を

きたしているが、重複箇所を削除して混亂をまねくより、そのまま保存することを許容されたいと思つてゐる。

宮本村は面積四万里、舊時四ヶ村から成つていて、中心を横川といい、その南北に竹貫田、大久田、三株以下多數の小諸部落がある。部落間には必ずしも高くはないが丘陵があり、相互の交通を隔てている。ために諸部落間の情報は、一旦横川に入つた後他部落に傳わるという有様である。人口は約七、四〇〇、世帯數一二〇〇。農業を主とするが耕地が著しく狭いため、國有林に依存し炭焼きその他の林業に従事することが、どの家庭にとつても殆んど常態になつてゐる。なおこの村は無醫村であつて、僅かに保健婦がおかれてゐる程度なので、住民の健康状態ははつきりつかめないけれども、隣村の醫師の所説によると、「まあ、慢性の榮養失調なので、大きな病氣をすると、どんどん倒れます」という意見であつた。以下參考のため、本村の產業的數字中の若干をあげておきたい。

(一) 米作地二九五町歩、反當收穫一・五石。麥作地一〇八町歩、反當收穫大麥一・四石、小麥〇・八五石。木炭一八萬俵。木材三五萬石。外に若干の養蠶ならびに煙草栽培。

(二) 山林約一萬町歩、うち官有地七千町歩、他は私有地であつて、入會公有地は殆どない。民有地の所有面積は十五町歩以下の小所有が壓倒的であり、それ以上の山持は僅かに二十一戸しかないことになつてゐる。

(三) 所得は概して低位であつて、昭和二十三年度において免稅點（一萬五千圓）以下と認定されたもの全戸數の六一%、十萬圓以上の所得者は八戸すぎない。このことは明かに本村が零細農を主として、しかも僅かに副業であつた製炭業も、現在では火の消えたように淋しくなつてゐることを物語る。農村好況が去り、不況がそれに向つて來襲しつつあるときの山村生活記録が次の調査事項である。

二 竹貫田

官本村小學校竹貫田分教場には、部落内二十二戸の家々から七十人の子供達が通つてゐる。子供達の家庭は今のところ極貧者とみなさるべきものはない。だがそれにもかかわらず、ごく最近四年から六年までの二十八人について調査されたところに従うと、このようなところかまだありうるか、疑いをもたれるような事實が出されている。

統計的に示されたところは、こうである。汽車をみたことのあるもの、男四人、女四人。汽車に乗つたことのあるもの、男二人、女二人。電車を見かつ乗つたことのあるもの、女二人だけ。バス——二里半先きまで通じてゐる——に乗つたことのあるもの、男二人、女二人。トラックに乗つたことのあるもの、男十二人、女六人。海を見たことのあるもの、男三人、女三人。市を見たことのあるもの、男二人、女一人。町を見たことのあるもの、男六人、女三人。新聞をとつてゐる家、十三戸（購讀新聞は主と

して福島民報と朝日である）。ラジオのある家、五戸。電燈の暮る家、十四戸。映画をみたことのあるもの、全部。床屋にいつたことのあるもの、男四人、女十二人。時計のない家、三戸。キャスターを食べたことのあるもの、男九人、女十一人。アイスクリームを食べたことのあるもの、なし。……ますざつとこのような次第であつた。

この調査からも推測することができるように、私達が調査にいつた竹貫田というところは、福島縣の最も山奥の部落であつた。それは宮本村の中心地松川から、相當よく作られた木炭運送用のトラック道路について、北に北にと二里半ほど歩いていくと、海拔約五〇〇メートル位の箇所にはつかりと浮んでゐる部落である。この部落から他の部落に通うには、一里くらいも歩かねばならない。しかしそれにもかかわらず、部落は早くから開けいたものと見え、家作も一般に古びてゐるだけでなく、竹貫田という名前そのものが、室町、戰國の時代にあつた、近隣の竹貫城主の飯米を作つた場所だつたといういい傳えまでも残つてゐる。それは山間ではあるが田畑のついた部落であり、その上にこの部落でとれたお米の味は、近在では一番うまいそうである。

このようにして古くから開かれた、それでいて四圍の世界から孤立した本物の山奥の部落に、あらゆる意味で古い感覚が残されているのは當然だつた。古い生活秩序のなかで、儀式的な意味で残されているものは、むしろ少い。あるいはもう一步進んでい

のなら、儀式的な「民俗學者」などからしばしば興味をもたれる慣行は、實際のところ成立していなかったのかも知れない。部落のなかに残されている傳統は、かくして餘り民俗的興味を伴わないかも知れないが、しかし決して無視することのできない重要な日本的特質を、はつきりと三重的に浮き上らせているのであった。

部落の家々を訪問して第一に目につくのは、いろいろが常に土間にむいて切つてあり、そして、土間に接續する一方には、座席が全部設けられていないことである。いろいろのまわりの座席のうちで、土間にむきあつた正座になる箇所は、主人の座る「ヨコザ」である。「ヨコザ」にはお客は決して座らない。座れば「米をはからにやならない」——家族の生活について責任を負わねばならない——から、うつかり座ることができないのである。「ヨコザ」から向つて右に當るのが「客座」である。客座には一般にきれいなむしろがしいてある。しかしこの座にすわるのは、主人によつて保護されていることをも意味するのであつて、名譽なのか、不名譽なのか、はつきりしない。客座の正面に當るのが「腰元」といつて家族のすわる場所である。多くの場合主婦はその中央にばゝ居して、家内のことを支配する。しかし主人が隠居して、新主人が「腰元」から「ヨコザ」に上進しても、隠居は相變らず新主人と「ヨコザ」を分つてゐるようである。

爐邊に坐る順位の問題は、松川附近ではもういくらか象徴的に

なつてゐるらしい。しかし竹貫田では決して單なる象徴とのみは見受けることができなかった。家族關係の序列によつて、家庭内における權力の序列が決定される。それによつて家父長權が強化され、五人から十數人にいたるまでの人々が、家長の支配下におかれてゐるのである。

家族的な序列の問題は、更に親族の序列にも發展してゐるらしい。竹貫田の部落内で一番古い家柄とみられるのは、Nといふこの邑のたゞね庄屋を勤めていた家の後裔であるらしい。N家の先祖は名字帶刀を許された豪農であつたとか、しかし實際は農業よりむしろ酒屋や馬の飼育に従事してゐたようである。ところで現在の狀態では、總本家と稱される一軒が、他の七戸からは疎外されてゐるらしく見られるが、それでも残りの七戸に關するかぎり、統一的な序列はとれてゐる。序列のとり方は必ずしも財産の多少にはもとずかない。財産の多少を問題にするのなら、N一族のなかで最も有力と思えるのは、田畑の外に山林百町歩以上をもつK・Nさんが首位である。しかしそれにもかかわらず、K・Nさん一家の人は、自分の直接の本家に當るT・Nさんの一家には、十分の敬意を知つてゐるらしく感ぜられた。

家族的統一の濃厚さは、さらに親分、子分と稱する關係にまで發展する。といふのは、一家の誰かが分家をしたと思う場合に、その親なり兄なりに當るものが、若干の耕地を分ち與えたり、住居の建設に手つたり、營林署や村役場に交渉して開墾

豫定地の貸下を受けてやつたり、林産組合の組合員たる資格をもらい、冬期労働のために必要な、炭焼き原木の特賣を受けうるように奔走してやるのであるが、この種の親族的な援助を期待することのできないもの、殊に他村からこの部落に入つたもの、親の許さぬ戀仲になつて家を逃げだしたものなどは、どうしても實親でなく、「親分」に頼らざるを得ないからである。これらの人々は、親分らしくふるまへるような「有力者」になきついで、何かの世話をしてもらう。親分の世話することからは、事情によつて異なるが、その最もよい場合でも、國有地の貸下げ許可を取つてやり、未墾地の開墾ができる程度に骨折つてやることである。しかしその程度の世話であるにせよ、保護者のない近頃の開拓者にくらべると、格段の相違が實證されているようであつた。

竹貫田の部落から一里半ほど離れた箇所は大佛山といふのがあつた。標高は七六七メートル、しかし土地そのものが相當高くなつてゐるわけなので、山頂から一〇〇メートルくらい下つた箇所、山をとりまく一本の道がついてゐる。この山のまわりは附近の分家を希望したがる人々が、新しく開墾のため入植してゐるところであるが、それだけに個人的な保護者のある人となない人の中には、極端すぎるくらいの差があることを、みせつけられないわけにはいかなかつた。

大佛山で訪ねた一人の開拓者は、近在の家から分れた人であつた。彼はかなりお粗末な家屋であるが、一軒の普通の農家をもつ

ており、農具の類もそろつてゐる。その人は自分の手一つだけではなく、いくらかは縁者の助力を受けて、アカ松の林を切りひらき、七、八反歩の水田を開いてゐる。土地が高すぎるため、冷害のおそれはないでもないが、水利の便は必ずしも悪くない。だからしてこの人は今後なお困難にあわなはいとはいへぬにせよ、ともかく開墾地に定着し、農民として續けていく可能性が、ある程度までありそうであつた。

然るにもう一人の開拓者は、樺太から終戦直前に身一つで脱出した夫婦とその子供であつて、内地のあちこちをさまよつた後、この村に開拓地があることを聞きこんで入つてきた人である。この人は自分の子供の一人を、天吾とよぶ附近の部落に養子に入れていると稱してゐるが、養父になる人の話し具合では、この縁組について觸れていくことを、餘り好まない様子であつた。彼は開拓者が入つてきた前後には、若干の世話をしてゐるが、開拓地が餘りひどいため、將來農民として定住することのできないのを見切をつけ、なるべく關係を切るように努めてゐる模様であつた。

實際一家五人の人々に新しくこころげこまれたら、誰だつて餘り愉快でないし、永久的に援助できるものでない。樺太歸りの人に與えられた開拓地は、それほどひどい絶望的な土地である。

樺太歸りの開拓者を含む數戸の人々が入つてゐる箇所は、大佛山の山頂に近い道路から、専ら上部の方だけである。斜面は相當急峻で、息を切らさねば登れなそうである。その上に大佛山は山

の多い宮本村でも第三位の高山とか、もちろん秋ともなれば物凄
い風がふき、もつと下つた部落ですらも、家屋さえゆれるばかり
だということだつた。開拓地はこのような地形に屬するために、
もちろん水田になるどころの騒ぎではない。肥料はどんどん流れ
てしまい、入れたとてむしろ無駄である。近在のSさんにいわせ
れば、あんなところは成田山のようにお寺かお宮をぶつたてて、
參詣人を集めなければ立つていかない場所である。それをどうい
う氣で開拓地に選んだか、Sさんには何と考へてもわからなかつ
た。なぜ山の頂上を林のままにしておかず、そこに畑を作らせた
のか、なぜ開拓させるなら道から下を選択し、寒害はあるかも知
れないか、若干の水田が開けるようにしてやらないか、宮本村七
不思議の一つだったのであつた。

樺太歸りの開拓者Wさんは、隣村に住む團長のAという人から
面倒をみてもらつてゐる。Aさんは開拓とは何の關係もない小間
物屋さん兼材木商であり、附近の評判は餘り好しい方ではない。
彼はあちこちと渡り歩いた農村の紳士であり、それだけにむしろ
いまり屋で小ずるい方だと噂されている。ところがこの人が營林
署と何を話したか知らないが、犬佛山の官有地から樹木を伐り、
その跡地に開拓者を入れることにして、自らその團長におしなつ
た。開拓者は材木もその代金も、一木一錢としてもらつていな
い。開拓者が與えられたのは、「二十年賦だか三十年賦だか」で返
済することになつてゐるバラツクを、「縣の低利資金で」建てても

らつたこと、家族一人について上衣一枚つづをもらつたこと、そ
の他ごく僅かな給與にすぎなかつた。彼はそれらの給與物資に對
する支拂關係がどうなつてゐるのか知らない。何れは何年賦かで
拂つていくことになるのだろうか、現在支拂わずにすむことは、
唯一の幸いであると考えさせられてゐる。開墾の助成金にいたつ
ては、もらつてゐるものか、もらつてゐないのかも判つていな
い。假にもらつてゐるにせよ、何かの借金があるのであらうか
ら、それと差引されてゐるものと、彼は信じてゐるのである。

犬佛山の開墾は、そんなわけで殆んど開拓者の生活を支えてい
ない。その上に新規の開拓者は林産組合にも入れてもらえぬの
で、炭焼きをすることもできない。だからして必然的に日雇いの
機會を探し、金なり食糧なりをもらわねばならない立場におかれ
てゐる。彼はどれほど働いても足らないので、時には團長のA氏
のところに借りに行く。A氏は今までのところでは、その度に
「快く」貸してくれた由、借金は遂に現在では一萬四千圓くらい
になつてゐる。開拓者のWさんは、何とかして借金から抜けねば
ならないと焦つてゐる。少くともこれ以上借金をするわけにいか
ないと、彼は主張する。しかし開拓に關する國庫補助の計算はみ
せられたこともなし、公問を主張したこともなかつた。このこと
は縁もゆかりもない開拓者が泣きこむと、千、二千の金を快く貸
してやり、催促もしない好人物が、世のなかにゐる實例とみなす
べきものなのか否か、どちらにしても注目すべき事實にちがひな

る。

親分のいることと、親分なしの開拓との間には、このようにしてみるとどこかに差異があるらしい。開拓者のうちで一番條件のよいものは、部落に一族の家があり、住宅や既墾地を分與された「新宅」である。しかし他府縣からきた人や、戀仲を親に裂かれようとしたため逃げてきた子分のものは、これより遙かに不遇である。これらの人々は家屋を自分で建てねばならないし、土地も新たに開かねばならない。親分にしてもらえないことは、精々土地を借りてもらうこと、なるべく條件のよい土地を選んでもらうこと、林産組合の「株主」になれることくらいである。しかしそれにもかかわらず、子分として親子の縁を結んだ以上、親の恩を忘れることなく、忠誠の誓いを果さねば、人並みの義理を缺くものとして、部落の指彈を受けねばならない。だがこのような服従義務を伴うにしても、數里離れたところに住む材木商Aさんから、犬佛山の伐木許可を求める理由を作るために利用されたかどうか知らないが、風にふきとばされそうな山の上に開墾地を與えられ、恐らく開墾の終つた時分には百姓をやめねばならない運命におかれるよりもましなのであろう。營林署、地方有志、開拓者の間には、このようにしてわれわれには不可解なものがある。

家族、親族の關係を離れてもう一つ大きく廣がついているものは、部落の血族的支配である。竹貫田部落でも、今度の農地委員選舉には、N家の總大將Tさんが出馬した。しかしそのT・Nさ

んは、同じ部落に住む日農の宮本村支部副委員長Kさんに十票の差で敗れた。Kさんは今では昂然としてボス支配の時期が去り、親分子分の關係が消え去るべき日がきていると主張する。しかしそれにもかかわらず一族の關係は、すべての經濟的利益より強力であることを認めている。Nさんの分家でも、分家中のあるものは舊小作人、貧農と、本質的に違つた立場には立つていない。しかしそれにもかかわらず、彼らを説得して組合に加入させること、投票させることすらも困難である。だからしてこのような家族的結合が強力であつた時代には、やはりその團結の力によつて、部落全體の支配が可能になつていたのである。

Nさん一族の竹貫田支配株式は、モデルトなものであつたかも知れない。本家のNさんや、分家のK・Nさんなどは、他の地主達と共同で、解放された土地についてまで、現物で小作料をとつていたということだつた。しかしそれにもかかわらず、舊小作人の間でも強い人、たとえば現農地委員のKさんらに對しては、そんな要求ができなかつた。相手が強ければこちらは弱くなり、相手が弱ければこちらは強くなるということが、この部落でも一般的な原則だつた。だからしてこの部落の場合では、大概のことが喧嘩にまでならないで解決されていたのである。

けれどもNさんやその友人達が求めているものは、あくまでも喧嘩の起ることがないように、「思想の惡化」を防ぐことである。最近では、「日農」のような「惡思想」が入つた上に、三里も離れ

た里方から、時々「キョウサントウ」——厳密な意味における日本共産黨ではなく、部落の傳統的思想に反するものを宣傳し普及しようとするものが、すべて「キョウサントウ」であるらしい——が杖をつきながら上ってくる。その時にはNさんやそれに同調する青年達が、部落の入口まで出張し「懇談の上」——とN氏はいう——歸つてもらふ。「キョウサントウ」が承知しなければ、至急巡査にかけつけてもらひ、下の方に強制同行を依頼する。要するになるべくこの部落を外の風に合わせることなしに、獨立した一つの地帯として、安全に保持することが望まれているのである。

ところでそのようなN氏の政策に、眞向から爆弾を投じたのは、最近では分教場の先生だつた。分教場は部落二十二戸の子供を教えるため、一年ないし三年までの一學級、四年ないし六年までの一學級、計二學級から成つてゐる。然るに最近までいた先生は、夫婦で一學級づつ教えていたのであるが、どういふものか「キョウサン主義」にかぶれてしまひ、村の青年達に影響力をもちだした。思想的影響といつても何でもないことであり、青年達がラジオ討論會をきき初めたり、文化會を開いて戀愛の自由を討議しだしたという程度ではあつたらしい。しかしそれにもかかわらず、このような空氣が山の部落に入つてくることは、Nさん達には大問題だつた。そこで彼らはことをなるべく無害にすますため、Nさんの學務委員たる資格を利用して、先生には下の松川の本校に轉任してもらひ、どうやら問題を片づけた。青年達も影響

者がなくなるや鎮靜し、N氏選の盆おどりの唄に應募して、「はあ米のなる木をわらじにはいて、踏めば黄金の音がする」などどうたうことにきめてしまつた。

山村の「平和」を保つには、このようにしてそれ相應の苦商がいろいろらしい。しかしどれだけ多くの工夫をしても、部落の有志らが部落のため率先して犠牲を拂ねばだめである。犠牲は實際に負擔されている。ことにK・Nさんの住居には、部落にくる營林署、地方事務所、村役場の人などを泊めるため、特別な二階建ての離れが一つ作られている。この離れはまさに部落の外客接待用の公館である。離れはそれほど廣くなく、二階には八疊一間しかないけれども、それでも十分にサラリーマン向きである。分家のK・Nさんがこんな離れを作らざるを得なかつたのは、同氏が長いこと村長をしておつたため、それに何かの連絡があつて、「ここにいたつた」か否かはわからない。だが同行の唄君が、遅れてわれわれのところに来たときの話によれば、下の部落でK・Nさんの住居をきいたとき、そこに集つていた數人の人々は、「ああ、あの有名な人の家かね」といいながら、げらげら笑いあつたということである。

分家のK・Nさんだけでなく、本家のNさんも、部落の公館の主人である。われわれが竹貫田にいつたとき、K・Nさんのところにはバラチフス患者がでいたので、宿泊を遠慮されて本家の方にお世話になつた。本家でもわれわれを快くもてなしてくれた

だけでなく、そういうふうの外からの來客が一月に、一二度あるのがむしろ自慢であつた。その上に本家の主人Tさんは、何か村に宴會でもある場合、その適地として近所にある芝山というところへの案内者である。Tさんに従えば、近頃は村會議員や地方有力者を招待する會合も、大變難しくなつたさうである。下の松川に一軒ある旅屋などで飲んででもいけると、どこからききつけるのか「キョウサントウ」が亂入し、文句をつける公算が甚だしく増加した。そこで村の歴々も、竹貫田のNさん方で勢ぞろいした後一里ほど歩いた上、馬に辨當や酒を積んで海拔八一九メートルの芝山まで登つていく。芝山の山頂は開けていて、自然生の芝生をなしているために、なかなか美しい廣場である。眺望もよくきくし、景色は非常にきれいだ。だからして春秋の晴れたすがすがしい一日を、この山で楽しもうとするグループは、敢て宮本村だけでなく、近隣の村々からも集つて、四組も五組も酒宴をはつてゐることが少なくないさうである。

芝山の効用はまだ外にいろいろな形で存在する。村にある林産組合の總會も、毎年一度つこの山で催され、できたら營林署の人なども招待して、参加者が悉く「ぶつたおれるまで」酒を飲む。それは村の人々にとり、楽しむべき一日かも知れない。トラックで送りこまれ、馬でかつぎ上げられる料理と酒は、Nさんの宰領するところであるらしい。だがそれだけにNさんの責任は輕くなく、参加者に満足を与えつつ歸さねばならない。公人の職務もこ

こにいたつて大變だなあと思わせる。

Nさんやその友人が奮闘することによつて維持される部落の傳統は、いうまでもなく部落民の自給自足經濟に基礎をおいてゐるのだといふことができるであらう。その結果、部落の人々の觀念に従うと、自給自足の基礎になりうるもの、つまり住居と田畑が不動産であり、その他のものは動産であるらしい。本家のNさんのように部落の最有力者の一人であり、そして長いこと村の農會會長を勤めていたという人が、われわれのためお酒の相手をしてくれながら話したところでも、「今度法律が改正になつて、不動産は長男が保有量の限度まで相續してよいが、山林だの、家財だのといふ動産は、子供達が平等にわけようになつたから……」ともらしてゐるのであつて、動産、不動産の分けかたが、法律家のそれとも全くちがつてゐることを、よく暗示するところがあつた。

農民が不動産に對する部落の人々の執着は、積極的には激烈な勞働により、消極的には生活の單調さをあくまでも維持する態度によつて示される。これらの面は正直にいつて、今さら實見談を書く方がおかしいくらいである。

農家の勞働がどれほど激しいか、具體的な事例をあげる必要は今のところ存在しない。それは誰でもが知つてゐることを、知つてゐる通りに實行してゐるだけのことである。女性でも毎日朝夕の兩回、十二貫前後の草を刈り、それを背負つて歸つてくる。そ

してわれわれが竹貫田にいつた時分には、煙草の收穫が初まつていた時だつたので、煙草耕作の勞働がいかなるものか、實地に知る機會をもつた。煙草は形こそちがつているが、養蠶と全く同性質の仕事である。植付が終つた前後には、專賣公社から人がきて、各家の收納すべき煙草の枚數を豫めきめておく、豫定より著しく少い葉數しか納入しない百姓は、專賣法違反の嫌疑を受けて告發される。夏になり、收穫期のきたときには、葉をとり入れて百八十枚づつ一本の繩にゆわいつけ、ゆつくりとかげぼしをしなければならぬ。かげぼしの期間に雨がかかるようなことでもあれば、葉は眞黒にちぢみあがり、等級も非常におとされる。

竹貫田およびその邊一帯で栽培されるのは、松川葉と稱する上質の葉であつた。松川葉は宮本村の松川附近で發見された品種というが、水のなかにつけてからでも火がつくというほどまで火もちがよく、味も輕やかな輸出向きの煙草である。それだけにこの煙草の優良種を作るには、家屋全部を煙草をほすことにあて、自然的に水分がかわいたときを見計らい、霧ふきで霧をかけた後、一枚一枚丁寧にしわのしして、三十枚づつ一束にくくりあげ、それを專賣公社の指定したように配列し、一まをめにして納入しなければならぬのである。煙草を作るのは、今のところ米を作るより有利である。米は山田のこととて一反歩五俵はなかなかたれないが、煙草ならうまくいけば二萬五、六千圓のかせきになる。しかしどの農家でも餘りに多くの煙草を作るのに、場所不足、人

手不足に陥るので、せいぜい一反歩程度で止めている。それは養蠶よりもつと厄介な、そして養蠶より手數のいる面倒な仕事である。そしてウィットフォードルが他の著書から引用して、「最も、ぜいたくな商品としての絹は、最も窮乏した地帯においてのみ作られる」と主張していたのが眞實ならば、煙草も同じ條件を前提に栽培されているのである。日本型煙草栽培には、機械化の觀念がほんの一毛も入っていない。だからして勞働力の價格が安く、零として計算される場合のみ、煙草は著しく有利な産物とみられてゐるわけである。

煙草栽培の問題は、必然的に家族外勞働を排除して、食うだけで満足して働く人々の集團の維持されていることを、直接に物語っている資料である。家族の人々は、Nさんのところよりもつと金持で、百萬、二百萬のお金なら山を賣るだけでも作れるといわれているK・Nさんのところさえ、物賣いほどよく働いているらしい。この家では農地解放の直前に、小作人からできるだけ土地を取上げておいた上、子供達に分家させ、各々一町歩以上の田地を與え、獨立させているということである。家族はそのために少い。しかしその少い家族によつて、二町歩以上の土地を耕作するだけでなく、山林の手入さえ人を雇わずにやつている。八時間勞働はこの場合には存在しない。しかしよく考えてみるならば、工場においてすら八時間勞働は、勞働時間を定める基準ではなくて、それ以上の時間を働いて時間外勤務料をかせいだり、或いは

内職労働の時間を得るための前提にすぎないことを、われわれは知っているのではなからうか。

労働の激化が行われていることは、何らかの意味における「かくし田」、公表せられない収入の留保されていることを暗示する。部落の人々の言説によれば、耕地面積は公稱より廣いどころか狭いという。その點は或いはそうかも知れないが、もしその言説を額面通りに受取れば、部落民は供出できる以上のものを供出し、支拂い以上の租税を支拂わねばならないことになっている筈である。ではこのようにしてできた家計の穴は、どのようにして埋められているのだろうか。煙草も確かにその一つである。しかしその外に一家を動員し、馬や緬羊を飼育して、生後半年もたつた後、それを市に出して賣ること、冬期には炭を焼き、それを一つの生業に加えること、あらゆる日雇労働的な仕事を探し、駄賃をもらつてそれに従事することなどが、ここでは起りつつある最も主要な事件である。

竹貫田部落には、私有林もいくらかはあつて、主としてNさんの一族などがもっている。しかしそれよりも遙かに廣大で、木炭の原木を部落民に提供する役割を演じているものは、物凄く廣がつた官有林である。宮本村全體としてみると、官有林七千餘町歩、私有林三千町歩といわれているが、後者のうち極めて多くのものは、大久田方面のオテナ山林組合の所有に屬しているために、その他の箇所にあるものは、餘り重要性を有していない。炭

は専ら官有林の拂下材木によつて作られる。だからして營林署と交渉し、安く拂下を受けることは、竹貫田部落一帯の生存に關する事實である。

現在のところ營林署から薪炭材を拂下げるには、舊來からの人によつて構成される林産組合がまず一割の特賣を受け、次にそのうちを株數に應じて區割した後に、くじびきで分配することになつてゐる。うまいくじ運に恵まれた場合には、足場のよい、なら、くぬぎなどの多い區割を手に入れて、木炭一俵分の原木代二十圓くらいですませることができるとは、しかしまずいくじ運にしか當らなかつた場合には、一俵の原木代が五十圓くらいにつくだけでなく、いくらかも焼けない不利がある。農家にとつて炭焼きが、いくらかでも家計補助の機能を果すには、どの道これだけでは足りない。好運の場合でも、特賣で手に入れ得る原木は、せいぜい五十俵分くらいであり、しかも得らるべき手間賃は、一俵について五十圓前後である。そこで炭焼きの仕事を擴張しようとする人は、特賣價格の二倍も出して、山持から私有の山林を購入するか、營林署の公賣に参加して、無理にでも原木を買わねばならない。手間賃のマージンはそれだけひどく安くなる。しかもこの頃では木炭も、公定以上ではなかなか賣れないし、また賣りにくいので、炭焼きは段々不引合な仕事になつてゐるとのことである。

竹貫田部落の人々は、このようにして一年中、何かの仕事をや

つている。しかしそれにもかかわらず、最近の農業經營には、どんな家でも五萬圓、少し大きな家庭では十萬圓以上の現金支出を要するので、肥料すら配給を辭退する人が増えてきた。生活はその場合には益々切りつめられる。そして食事にせよ、衣料にせよ、單調な、生存を唯一つの目的にするものが、選ばれるようになるのは當然である。

われわれを泊めてくれたNさんのところでは、ずい分と骨おつてで馳走してくれた。なすのうでたもの、し、そとかぼ、ちやのあげたもの、さやい、んげんをうでて黒いものをまぶしたものの、鶏肉の入ったおつゆなど、それが辨當以外の場合には、くりかえし出されるほどのご馳走になつてしまつた。しかしご馳走になつておきながら文句をつけるのは恐縮であるが、何となくすべてのものがうでにうでられた感じがしてならなかつた。このような味覺的な單調さは、私自身の経験したかぎりでは、どちらかといへば珍しかつた。今までのところ私は、宿泊を許されたどの農家でも、何か一つづつ得意とされるご馳走に恵まれていたのであるが、竹貫田においてはそれがなかつた。うでにうでられたものが毎日の食事であり、そしてそれが一年間續いている。うでるのは一回に大量にうでておき、なくなるまでそれが食べられる。しかしそれにもかかわらず、Nさんのところは最上流の家庭であり、どの家でもこのやりかたがもつとちんまりと支配しているのである。

生活の單調は、このようにして強制的に維持される。そこでは

秋田の山奥の農村で、すばらしいその實のみそ漬を出されたときのような、驚異を感じる機會が與えられなかつた。その代り部落の人々は、移住、出稼ぎを殆んど行わず、谷間の世界に住みつこうとしているのである。

もちろんそのような谷間の世界でも、農地解放は一つの重大な事件であつた。そしてその結果、村の日農の農地委員すら、今では四名まで占めていなければならない。Nさんやそれと同じような地位にいる舊地主達にとり、舊子分や小作人達が段々背を向けていくことは、いうまでもなく快いことではない。舊小作人達は、今でこそいろいろ鼻を高くしているけれども、いつかは再びわれわれの世話にならねばならぬのではないか。その時になつてから思い知つても、もう遅い。人生はつきあいが大切である。しかもつきあいや義理人情を忘れるのが、民主主義だというのなら、民主主義はまた同時に破滅への道である。竹貫田の生活は、嚴重な統制と節慾によつて維持されてきた。ひえや粟を食べてでも身を粉にして働くよき古き日の傳統がくずれたら、この部落はどのようにして成り立つことができるであらう。一時の調子にうかうか乗つて、勝手なまねをする奴までの面倒はみてやれない。その時になつてあわてるな。これがNさん達をして民主自由黨——Nさんは民自黨を政友會とよんでいるほど、民自黨と政友會を分つていない——の熱心な支持者となり、そのいわゆる經濟

九原則なるものが、農村の傳統的慣習の復活をもたらす日を待たしめている理由である。

實際Nさんの指摘したように、現在の日本の農村は、竹貫田のように世間から隔絶した山奥であつてすら、再び恐慌の前兆を感じている。一昨年はいうまでもなく、昨年の初めくらいまで、ここもまた木炭と煙草のインフレは、ある程度まで人々をうるおしておつた。だが今ではまるで無茶である。去年の十二月に出した木炭の代金は、八月になつても拂われていない。まともに支拂つてもらえそうなのは、煙草の納入代價だけである。税金はいくらか手心を加えてもらつてゐるにせよ、重壓としてしみじみ感じられた。農家には今では現金がなくなつた。はるばる平地方から、十里の山を越えてくる魚屋さんも、おしつけでなければ買手を探すことができなくなつた。だがその結果再び現れかけているものは、まず家庭内における全體主義である。個人的自由の維持は今では次第に困難になつた。だからして誰かが家庭の首長として、絶對的權威をもつて家族の支配を續けること、もし可能なら名君的有志が現れて、一族、一部落を統制し、グーともいわざぬほど人民をおさえつけるのが、部落の生活を維持するところの方途として、一つの明確な方向を現し初めてゐるようである。

だがそんなことになつてはたまらない、と農地委員のKさんは主張する。Kさんは竹貫田部落の全體が、農地改革にもかかわらず、山地のため殆んどその恩恵を受けなかつたことを認めるが、

しかしそれにもかかわらず、徐々に空氣が變りつつあることを力説する。この空氣が再びもとに歸るなら、部落はその殆んど全部をあげて、犬佛山の開拓者のようにならねばならない。そのような悲劇をNさんは嫌う。だからして再び自分と自分の友人をボス支配の下にもどさぬために、農民は農民としてのみではなく、労働者と提携してあくまでも全反動勢力と戦わねばならないという決意を力説しておつた。確かにこのようなひどく靜かに見える山村にも、時代の浪はもの凄い大きな起伏をうつてよせてゐる。日本の社會の原理である人による支配が再び可能であるか、それともまた原理としての法の支配が確立するか、それらは具體的にはNさんやKさんだけでなく、犬佛山のWさん、それに惜氣もなく金を貸しはするけれども、開拓補助費の計算を示さないAさんなどという形態で、渦きつつ進んでゐる。

三 大久田

宮本村を横川から大字大久田に入つて行くと間もなく、道ばたに掲示板と並んで、高さ三米程の石碑が立つてゐる。碑には水野由松翁をたゞえる文章が刻まれているが、これこそ、大久田の歴史を象徴するものである。即ちいろいろた美辭麗句の中に、翁の功績として、明治七年山林四〇〇餘町歩の拂下を受けたことがあげられてゐる。この真相は實は、當時奥州第一のやり手と稱された大バクロウの由松翁が、出来上つたばかりの明治絶對主義官僚を酒を腰につけて案内し、道々酒宴をもよおしながら上等の土地

を適宜自分の私有に拂下げることを認めさせたということである。これが後になつてこの部落の共有林として、その最大の經濟的基礎をなして來た。この共有林は、はじめ二一戸の株主たちから成る山林組合によつて管理されていたが、後に株主の中の貧窮化したものの株の譲渡があり、一八戸に減じ、最後に税金問題その他で一昨年末から分割することとなり、現在はすべて私有林となつてゐる。この廣い私有林と、その材木の取引による現金收入を資本とする副業（馬、めん羊、蠶）のためにこの部落は全體としていへば凶作に悩む東北農村の中の例外として、かなり豊かな生活營んでゐる。例えば分教所それも焼けたわけでもなく現在四學級だけ副式教授であとは單式教授が出来る位の設備である——その改築費一六〇萬圓の半を一戸平均七〇〇〇圓の寄附で賄ひ残りの半分は、青年團が木材の拂下をうけそれを賣り拂つた代金で賄おうという状態である。各戸に割當られた寄附も最高一萬圓に及ぶが、それでも他の町村で見られるような苦痛はなく、材木を少し賣つてやりくりしようと濟ましていられる調子。一般に農家を暗くしている筈の農業恐慌へのおそれも、こゝでは、——蠶はかなり影響をうけるが——めん羊の好況でカザー一され、「いよいよよとなれば木を賣れば何とかしのげますよ」というように山林所有の強みによつて弱められてゐる。

元來山村で農耕地を多く持たないこの地方では、農地改革も殆ど何等の影響を與えていないといつても過言でない。而も早くか

ら官僚との取引によつて廣い既得權を持ち或は何等かの意味でそのオコボレをうけてゐるこの部落では、——こゝでは地主小作關係はあまり見られないがそれに代る——山持ちに對する賃労働者としての焼子等も主として他部落の住民から成つてゐるので内部的には現在に至るまで殆ど目立つた階級分化を顯在化するまでに行つてゐない。まれに貧窮化して山林の株を失つた者でも、——その中には農地改革の恩恵を蒙つたごく僅かな者に屬する若干の人々がいるが——國有地に屬する放牧地採草地を利用する權利、及び製炭組合を通じて國有林から炭の原木を拂下げる權利は失つてゐないし、しかもそれが形式的にはクジによる分配という一應民主的なよそおいをとつてゐるために山林所有者との間の實質的な利害の對立についてはとかくあいまいにされがちである。

このような經濟状態は政治的な面にも反映して、村長の下にある區長を中心として、その下に一六の隣保班があり、それぞれの班の中では、一切が極めて圓滿に運ばれてゐる。即ち各班相互の間及びその中で政治的な問題が前面に出ることは殆どなく、二月に一日さるの日に開かれる庚申講（交替に一軒づつ順次に主催し座長となる）という各戸の代表者の懇親會での話し合ひですべてが決定される。總選舉や農地委員の選舉で誰に投票するか、別に誰が命令するということもなくこゝで何となく一致するのである。勿論この大久田部落の住民すべてが完全に等質的な山林所有者であるわけではなく、この部落の中で特に下大久田、松久保方

面に集中している（この方面は一入平均二〇町位の山林所有）のであつて、その他に例えば石神、有實方面になると五町位の山林所有者が多くなり、又全く山林を持たないものもある。たゞこれら非所有者も前に述べたような國有地での採草、放牧、薪炭原木伐採（これは製炭組合に一括拂下をうけ、それをタジによつて分ける）によつて、内部的には實質的に不平等であるにも拘らず、全體的にはこの恩恵に甘んじて他の土地におけるような大きな矛盾發生の原因となつて顯在化することは比較的少い。更に他の土地で往々見られる農村の過剰人口の問題も、馬、羊、蠶、炭という多角的な經營のために、農地は極めて狭いにも拘らず、樂に一戸一〇人位の經濟單位を存續させ、農家の二、三男の問題は——後に述べる開拓の問題はあるが——他の地方程深刻でない。

以上述べたような經濟的條件によつて、この部落は、大して出稼に出る必要もなく、一つの『閉じた社會』の中で充分に平和を樂しむことが出來た。この牧歌的な山村には現象的にいつて凡そ階級分化とか、鬭争とかいうことは永久に無縁であるかのようにさえ思われて來たが、こゝに時代の動きは決して例外を許さなかつた。その契機となつたのは現象的には外から與えられた條件としての開拓團の問題であるが、それは實は同時に、從來かくされていた内部的矛盾を現わにし、深刻化する媒介でもあつた。例えば製炭組合の中のボス關係が開拓團の問題を契機にして明るみに出されたり、役場の中の不正事件が開拓民の側からバクロされた

りしたのはその一、二の例にすぎない。次にわれ／＼は更に足を山奥にむけて、開拓團の實情を見ることしよう。

下大久田から山道を更に二里以上入つた大風といふ高原の頂上附近に「金森開拓團」というこの地方で有名な開拓團がある。「これをもう少し行くと右側に矢吹という樺太から引揚てきた團長がいます。樺太にいたせいか少し赤いようで、どうも今までの部落とは合いません。私も話をしないことにしていますからあなた方だけで行つて下さい。」案内をして呉れた區長さんは、「二つの世界」の境界線の近くでこう云つて、われ／＼だけをこの異つた世界に立入らせた。樺太の西海岸珍内から引揚て來たという四十すぎの團長矢吹氏の語るところによると、一昨年七月一日日引揚てからこの近くの山橋で最初の團長鹽田利翁氏（元滿州の鐵道員）等と開拓團を組織し、大風の土地を選んで、開拓に入ろうと計畫したが、元來此の土地は、國有地ではあるが、地元の放牧地として貸付てあつたので、地元側は放牧地を奪われては困ると猛烈に反對した。然しそれにも拘らず開拓團一行も生死に關する問題であるとして強引に入植、開墾を開始し、デ・ファクトの開拓團を形成して頑張つた爲、やむなく地元側も讓歩して昨年二月ようやく次の様な協定が成立した。

（次にその協定書を原文のまま掲げておこう）

協 定 書

字オテマ國有林入植に對し左記の通り協定するものなり。

一、牧野内入植戸數は六戸、一戸當りの開拓面積は二町歩を限度とする。

二、開拓地の周圍には木柵を入植者に於て構築すること

三、牧道は必要の程度を兩者に於て協議の上設置すること

四、放牧地の木柵は全面的に完備し馬匹の逸散を防止すること、但し是が實施は地元及入植者に於て協力すること

五、字オテマ國有林内に開田の結果字田志戸部落内の舊田が灌漑用水のため耕作不能となりたる場合は新田は耕作を中止し畑とすること

六、其他開墾に就ては營林署及其他關係官廳と協議すること

右協議する

昭和二十三年二月二十三日

東白川郡宮本村大字大久田字越代三八林班

協定者 阿武隈開拓團長 鹽田 利翁

放牧組合代表 水野 龜慶

部落代表 水野 彌四郎

立會者 石川營林署長 木村 新平

石川地方事務所次長 原 口 陽

石川地方建設事務所 加藤 周四郎

然し協定成立後も地元と開拓團との間には紛争の絶え間がなく、開拓團の初代團長鹽田氏は遂に團長を止めて去ることになり、矢吹氏がこれに代つた。その後も主として放牧問題を中

心にして紛争は續いた。何回かに互つて一人三段づつ位、放牧した馬に荒された。これを防ぐ爲終日畑で番をしなければならぬ。或時矢吹氏の畑に入つて荒している馬二頭を矢吹氏が留置して部落と折涉した。彼は、毎回畑を荒されたのでは團員の生命にかかわるから今後決して荒さない方法を講ぜよ、と部落側に迫れば、部落側では開墾地の周圍に木柵を作らないのが悪いのだとはねつける。これに對して團長は木柵を作る木一本切ることを許さないで、どうして柵が作れるかと反駁し、容易に解決せず、結局今後馬匹の逸散を防止するという部落側の言質を乞つて馬を返したという話もある。とにかく放牧の問題はどの開拓團でも最大の難問題であり、地元民は放牧上不利となるから何とか開拓團を追い出さうとあらゆる手段を盡しているのだと開拓團の側では言つており、地元側の側では、折角今まで平和であつたこの部落に大變うるさい連中が入つて來たと頭痛の種にしている。この團長矢吹氏のところでは夫婦二人だけで一緒に働いているために、今年の秋位から配給をうけないでやつて行ける程度になり、現金収入の方も、めん羊を一頭借りて來てこれを飼育することによつて——肥料もそれによつて助かる——得た利益を貸主と折半することになつていたので次第に樂になるだろうと見通し、更に強引に折涉した結果營林署から木炭用原木の拂下を金森開拓團としてうけられることになつた——これは開拓團中の例外であることは後述する他の開拓團と比較すればすぐ分る——ので炭焼によ

る収入も豫想され、ようやく長期に亙る闘争の成果があらわれはじめた所であるが、同じこの團の中でも、尼崎で佐官屋をやつていたある農業未経験者のところでは、働けない小供を四人かかえて、主人一人では開墾もはかどらず、(主婦は産後體が具合が悪くて入院している)徴用中のわづかの貯えも使いつくし、主食の配給をうける現金もなく、ジャカ芋の莖まで食べて辛うじてしのいでいる有様。その上開拓地として許された土地の中に立つていた木を開墾のため切り倒したのを盗伐として告訴され、一一六〇〇圓の罰金を營林署におさめさせられて、一體將來どうなるのかと暗い顔をして話している。

これに對して、同じ大風に土地を接していながら、やゝ類型を異にする開拓者がある。それは岡部春男氏一家を代表とする地元と開係のある開拓者たちである。彼等は八年間焼子としてこの山で炭焼に従事しており、その傍ら次第に小屋の周圍を開墾して行つて、遂に樺太引揚者たちの開拓者と一緒に阿武隈開拓團として國有放牧地の貸付をうけたわけであるが、彼等は地元との關係も比較的よく、(他の人々と違つて四町の開墾地を持つていることも特色である)炭焼についても既得權を有しているというような關係から、矢吹氏等とは必ずしも利害を共にせず遂に分れて矢吹氏等だけで金森開拓團を作つて地元と強硬に折渉することとなつたのである。従つて岡部氏等は地元との紛争も少く、區長さんも、こゝには安心して立寄つて話をして行くという穩健なる思想

の持主である。

もう一つこの近くにあつて、やゝ異つたものは、炭焼をやつている事業者(この邊では炭焼の事を一般に「事業」という)がその焼子を連れて入植した場合である。われ／＼の見た例では三人の焼子、——それは親代々その事業者の焼子として雇はれている。流石に現在では賃金で一俵當り三〇圓から四〇圓位をもらつているが、主人の家の裏の小さな物置のような所に住んでいて、耕作の手傳もさせられる——をつれてそのまゝ開拓者となつた場合で、この様な開拓者は、國有林の伐採跡(木炭用原木を伐つたあと)を開墾しているために放牧の問題も起らず、又木炭の原木の拂下も從來から行はれているので、地元との關係はより一層圓滑であるといえる。これに對して、戦災、疎開、食糧難等のため遙かに深い縁故をたどつて入植して來た大平草の開拓團では、地元との關係はこれ程圓滑ではなく、大體金森開拓團との中間位である。即ち大平草に二〇戸程あるこの開拓團は部落共有地(前述した共有地の分割前のもの)の中の放牧地に開墾をはじめたのである。したがつてはじめは地元との縁故によつて、否地元民の恩恵によつて、その共有地を耕作していたのであるが、やがて放牧問題をめぐつて地元との間に利害の對立を生じた。然しこゝでは金森開拓團の場合のように正面から闘争を展開することが出來ず、とかく泣寝入りに終り勝ちで、現金収入の最大の源泉をなす炭焼についても、原木拂下は部落の製炭組合が獨占しており、營

林署に行けば、一年間の拂下量は一定しているから別に拂下を行うことは出来ない、地元の組合に入つて割當てを受けよ、といひ、地元の方では、こちらは今までの拂下でさえ不足な位だからこれ以上割り込まれては困る、という調子で両方から閉め出されている。この障害と正面から闘争することを避ける結果は、結局不利な賃仕事をさがして歩くか、それも充分でなくなつた今日では炭鑛に出稼に行くか、或は農家の間を流して歩くヤミ商人を副業として現金収入をあげ、これで辛うじて配給の主食を買うという状態である。開拓者の側から言わせれば、地元側は、むしろ開拓團が困つて退去することを希望しているので、例えば共有地が分割されて幾つかの私有地になつたとき、その所有者との貸借契約書を、主人が炭鑛に出ていない留守に妻に無理矢理に印をおさせて、開拓地の範圍を最少限にしようとした企圖にもこのことは露骨に現れている。その土地貸借契約書は次のようなものである。

土地貸借契約者

今回合議ノ上左記ノ通り土地貸借契約致候也

記

東白川郡宮本村大字大久田字ヲテマ俗稱大平草

面積 約二反歩本日境界指定ノ通り

土塚積ミタルヨリ下、上ハ地主ニテ開墾スル事

借受期間 契約ノ日ヨリ向フ五ヶ年間トシテ期間満了時ハ再契

約ス

料金 昭和二十四年ヨリ支拂フコト、反當五十圓位、毎年十二

月末日限り納入ノ事

右之條項ヲ付シ契約致シ候モ借受人水野千代藏氏ハ目下炭鑛ニ出稼ギ中ノ所ナレバ後日都合ニ依リ貴所ヲ引上げ耕作セザルガ如キ場合ニ到リタル場合ハ貸借契約地ハ地主ヨリ開墾料金ヲ受取返地スル事トシテ借受人ガ勝手ニ權利ヲ他人ニ譲ズル事ハ出来ズ無斷ニ其他勝手ナル行動ハセザル事

右契約書後日ノタメ一札ヅツ署名捺印ノ上差上置キ候也

昭和二十三年五月一日

貸付人 水野 峰 悦
借受人 水野 千代 藏

地元から加えられた開拓民への壓迫は、これだけでなく、開拓團の幹部（これははじめは不思議なことに、地元の有力者で開拓を必要としない人が當つていた）の不正によつて加重された。即ち開拓者の言う所によると、今回農地委員（第三號）に當選した某氏は、かつて開拓團の幹部として、村役場とコネクシヨンを持ちながら、開拓者に特配された米、衣類その他を横流しし、その他にも役場關係で不正があつたため告訴され、執行猶豫かなになつた筈だということである。開拓團關係の補助についての中間搾取は日常茶飯のごとで三〇〇圓の補助金が一〇〇圓になつて來たこともあるという。この様な實情を詳しく話した後、この語

り手である若い開拓者は、「先づ幹部とか村の有力者とかいうボスを一掃しなければ、いくら補助金だ何だといつたつて駄目ですよ。結局開拓團を食いものにしている連中に皆とられてしまふのだから」と結論づけた。

最後に地元の二三男を中心とする特殊の開拓團について一言しよう。それは主として大正に見られるものである。元來大正の開拓團は國の事業として國有林伐採跡に作られたものであるが、この中地元に無縁なものは、前に述べたような阻止的要因のために殆どあきらめてこの地を去り、その跡に地元の二三男が入りこんだものである。彼等の或者は自分の舊い家から通い、又或る者はこの地に假小屋を建てゝ生活しているが、いづれにしても彼等は大きく自分の本家に依存しており、いわば、ようやく顯在化しかつた地元の二三男問題の安全弁として利用されているにすぎない。したがつてこゝでは地元との關係は最も良好であつて、開墾地が元來伐採跡であることも助けて放牧についての地元との争もなく、又炭焼のための原木の拂下は地元の組合の一員として加入している爲に何等の問題も起らない。しかし他面では、從來全く波瀾のなかつたこの大久田部落の中にびそんでいた問題が逆に、二三男が開拓團に入るといふことによつて露わにされ、これを契機として部落内の階級對立が醸成されるという萌芽を充分この中に見出すことが出来る。

いづれにしても明治以來依然として太平無事を楽しんでたこ

の部落——そして農地改革の影響も殆ど感じなかつたこの部落——にもようやく、時代の變化の波がおしよせて來たことは感じられるのであつて、このことは將來開拓團の問題、山林問題を契機として益々發展されるであらう。勿論同じ開拓團といつても前に述べたように、その主體が誰であるか——引揚、戰災者か、燒子か、炭燒事業者か、地元縁故者か、地元との縁故の濃淡により異り、又どこに入つたか、即ち國有放牧地であるか、國有林伐採跡であるか、部落共有地であるか、によつてそれ／＼事情を異にし、これに加えて地元といかに鬭争するかという主體的條件が附加されて、地元と色々異つた關係を生じて來ている。このことは更に具體的にいえば、どの程度容易に開墾しうるかという技術的な相異の他に、配給米をうけることその他のため、どのようにして現金收入をうるかという相異——例えば比較的資金に恵まれるか地元との關係に恵まれて馬、羊を飼育するか、或は木炭用の原木の拂下をうけて炭焼するか、或はそれらのいづれからも閉め出されて止むなく賃仕事をし、又は炭鑛その他の出稼へ行くか、等々の相異が生れて來る。したがつて近い將來においてこれらの利益が一致して急速に古い秩序を破壊して行くと思へることは早計であらう。事實彼等の政治的關心は、最も進歩的と思はれる金森開拓團でも、——地元民は彼等を赤いといつているが、——大體鈴木義男に投票する程度であり、農地委員の選挙でも日農系を支持するという以上に組織的に原狀打開の具體案を持つておら

ず、ましてその他の開拓團については、ぐちをこぼしながらも、政治的には無關心で、やはり何となく、土地から出た候補者に投票する者が多いように見受けられ、矛盾の解決策を専ら個人的にヤミをやるとか、縁故者に救助を求めるとかいうことに見出している現状である。しかし、それにも拘らず、「何といわれても、たとえそれが村の従來の考え方からどう非難されるとしても、私たちはどうしても開拓によつて生きていかなければならないので、その爲には何黨がどうということとを離れて古い秩序ともしんどん闘つていかなければならないと思います」という一開拓者の言葉は、やはりこの村の將來を暗示しているものといえよう。このように考えると問題は單に開拓者と地元との關係だけではなく、村そのものが新しい變貌をはじめること——そう遠い將來ではないように思われる。

四 ボスと官僚

I はしがき

(1) ここに述べるところは、私が大字大久田において、八軒の農家を訪問し見聞したところの實情にもとづいての報告である。したがつて、そのかぎりにおいての事實であり、そのかぎりにおいての分析であることは斷るまでもない。問題は、山林の所有ないし使用關係が、農村における階級的支配構造といかなる關係に立つかということを、ここ（大久田）にあらわれた現象の中に、それをおして理解することである。ただし、ここでは、開拓團

の問題は、一應考察外におかれる。焦點は、いわば舊大字の構造的秩序のもとにおかれた領域にのみ限定されるであろう。

(2) 農民生活に對する山林の意義は、つぎの點にある。第一に、山林は農民に燃料をあたえる。第二に、それは、肥料や飼料のための草木を與え、または、放牧場を提供する。第三に、山林の立木利用は、あるいは製炭として、あるいは製材として、農民に副業の機會をあたえる。このように、山林の農民生活に及ぼす影響は、決定的に重要である。ところで、ここでは、山林の大部分は國家の所有に屬し、その一部は個人の私有に屬する。（現在はその他の所有型態——部落有林などは存しない。）山林の大部分が國有林であるということから、課題は更に集約せられて、國家權力が、その物的きそとしての山林所有をおして、いかに農村を支配し、かつその支配が部落構造といかなる相互關係に立つかという點に、重點が向けられる。私有林については、簡単にふれておく。

(3) 調査に當つての私の問題的視點は以上の如きものであつた。ところで、その結果、理解された範圍では、問題は、さきにもべた三點のうち、第一第二の點よりは、むしろ第三の點の中に存するように思われる。だから、まづはじめに國有林における製炭の問題を重點的に取りあげ、ついでその他の點にも簡単に觸れることにしよう。

II 京木拂い下げにおける契約の構造

(1) 副業としての製炭は、現金収入の重要な部門をなし、農民勞働力の再生産には缺くべからざる意義を有する。しかも、ここでは、彼らは、その原木の大部分を國有林に頼らねばならない。「すなわち、國有林の樹木を拂いさげて貰わなければならない」のである。農民は、製業組合をつくり、その代表者をとおして原木の一括拂い下げを受け、更に組合内部でこれを個人的に分割して、原木に對する權利を獲得するのである。ここでまづ第一に、「拂い下げ」の性格が問題となる。「拂い下げ」の法的型態は、國家の代表者たる營林署と組合代表者との間の、一種の賣買契約である。ところで、この契約は、封建的性質を刻印づけられるように思われる。その「封建的」ということの意味は、つぎのとおりである。すなわち、元來は、このような契約は、本質的には、一種の純粹な商品交換契約たる私的契約にほかならない。すなわち、拂い下げとは、樹木の所有者と非所有者との間の商品賣買という純經濟的行爲にすぎないはずのものであり、したがつて、當事者は、かかる經濟行爲の摺い手として、平等なかつ私的な法主體者としてあらわれるはずのものである。ところが、營林署は、この場合そのような私的契約の當事者としてではなく、むしろ、公的權力そのものとしてあらわれる。

第一に、樹木の賣却は、國家の側からいえば、たんなる經濟的給付ではなく、國家が「農民のためにしてやる」拂い下げである。その名の示すとおり、樹木は、おかみの權威をもつた國家

が、上から下に「下げ渡してやる」ものなのである。

第二に、だから、農民の側からいえば、彼らは、一定の代價をもつて樹木をかうのではなく、おかみのものを拂い下げて貰うのである。彼らから正直に言つたことく、「おかみのおかけを蒙つて仕事ができるというわけ」なのである。

これらのことは、樹木賣買契約の私的商品交換契約たるの本質を蔽つて、その契約關係を、上級下級の權力支配服従關係たらしめる。すなわち、その性格は左の諸點の中に見られる。

(2) (i) 契約書は相互に交換されるものではなく、組合代表者から營林署に一方的に「差し入れ」られるべきものである。

(ii) 組合は、契約上の債務履行を嚴重に強制せられる。たとえば、賣買代金は、契約成立と同時に、卽座にその二割を支拂わねばならず、のこりの八割もまた、通常は一週間以内に支拂わねばならない。もし、その期間内に支拂えない場合には、遅延利息をとられるか、または、支拂いのおくれただけ樹木の引渡しをおくらされる。また、組合員が定められた期間内に樹木を處分しきれない場合には、延滞利息を拂わねばならない。彼らは、この場合、頭を下げて役所に頼みに行き「お役人」から「散々のごとを言われた」上に、高い遅延利息をとられるのである。組合の債務不履行には、このように嚴重な強制力が作用しているにかかわらず、國家の債務や履行、なかんづくその代金支拂い義務は、いかなる強制力によつても擔保されていない。國家が、遅延利息の

支拂いなどという、ことは、眼中にも、おかないで、平氣で義務不履行しつつ代金支拂いを遅延していることと對比して考えれば、兩者の義務履行の體様がいかに對等でないかはあきらかである。

(iv) また、この契約においては、同時履行の原則は公然と破られている。すなわち組合は、代金を支拂つても、現實に引渡し（拂い下げ）があるまでは、なんらの權限をも有しない。引渡しは、「お役人の都合」によつて、普通、代金支拂い後一ヶ月以内になされることに定められるのであつて、それまでは、組合の人々も、私法上は、すでに所有權が移轉したはずのそれら樹木に、一本でも手をふれることを禁ぜられる。ふれたら「盜伐」ということになる。

(3) 右に見たように、この契約においては、營林署と組合とは、相互に對等に權利義務を負うてはいない。ここでは、本來的に私的權利義務關係たるべきものが、權力關係としてあらわれる。このことは、國家權力が、山林所有を媒介として依然として絶對主義的な性格を溫存せしめていることの、ひとつの現象型態として理解されるであらう。農民生活のきそを抑えこれを掌握する國家は、こうして「拂い下げ」という、いわば上からの恩惠行爲を媒介としてつづつ實質的にその封建的ゲヴァルトを貫徹する。

このように、國家權力の農村支配は、第一次的には、「拂い下げ」における契約の封建的性格にきそづけられて、まづあらわれる。では、このような法現象は、農村における部落構造といかな

る關連に立つか。ここで、製炭組合の性格がつぎに問題となる。

III 製炭組合の性格

■(1) 製炭のための原木拂い下げは、營林署の製炭組合との間の賣買取約であることは前に見た。組合は、獨占的に契約當事者としての地位を有する。したがつて製炭をしなければならぬ農民は、すべて組合員とならなければならず、また事實なつては、組合員たるの資格は、法的には、その組合の管轄區域内に居住するということ以外に存在せず、したがつて、そこに居所をもつて製炭を希望する者は、すべて組合に入れるはずである。しかし、事實上は、拂い下げられるべき山林の面積があらかじめ限定されているために、組合としては、自由にその人數を増すことはできない。すくなくともそれを理由とすることによつて、新しい居住者の希望は拒まれる。このことが、新しく村内に入り來た疎開者や開拓者と、舊來の土着の部落民なかんづくその支配者層との間に、ひとつの對立關係ないし支配服從關係を招來する。實際にその希望が拒絶される場合には、對立關係はあらわに顯在化するし、それが許される場合には、新たな溫情關係ないし搾取關係が形成される。いつてみれば、製炭組合は、たんなる製炭行爲の擔

い手としての抽象的經濟人のあつまりではなく、部落共同團體を基礎とする具體的な部落民のあつまりである。このような組合員の封鎖的な共同體的意識こそ、一方においては、開拓者や疎開人などのいわゆる「よそ者」の「侵入」に對する共同の保るゝいとな

るのであり、他方においては、國家權力の封建的搾取の恰好な基盤ともなるのである。いまその前の點はしばらくは別として、論點を後者におきながら、製炭組合の性格を眺めてみよう。

(2) 製炭組合は、もちろん法人たる組合ではない。申し合わせ組合」なのである。つまり、「炭を、焼く部、落、民は皆で申し合せて組合をつくり、代表者を選んで營林署から原木を拂い下げて貰うわけである。

組合の規約においては、これは、近代的團體たるの構成を具えた組合である。その主要な點のみを抽出すれば、つぎのとおりである。組合の役員は、正副組合長各一・會計二名・監事一名・協議員四名から構成される。それらの役員は總會において選任され、任期は二年であつて再任を妨げない。總會は三月と九月の二回開かれる。そのほかに、組合長の權限により、あるいは全組合員の三分の一の要請により開かれねばならず（臨時總會）、それは、三分の一の定足數で成立する。そして組合の事業としてうたわれているものは、第一に原木の拂い下げ、第二に、組合員の福利増進施設のあつせん、第三に、木炭製法の研究等がその主要なものである。

(3) ところで、規約の中ではこのように近代的言葉で語られているところのものを、その實質的内容について見れば、それは、その前近代的性質をあらわに露呈する。

第一、役員の選出方法は明らかに示されていないのであるが、

資 料

總會において、あらかじめ豫定されている部落の有力者が「話し合い」で選ばれる。すぐ後にのべる如く、組合の代表者たるには、實質的にそれだけの資格を具えていなくてはならない。協議員の四名というのも、もちろん階級的代表者ではなく、部落に基盤をおく部落毎の地域的代表者がえらばれる。

第二に、組合の事業や運営はほとんど役員に委任されるのであつて、總會は、實質的には意思決定機關の役割を果さない。總會は、いわば「それら役員の報告をきくだけのあつまり」なのである。(三) しかも、そのさいに催される饗宴は、この日が組合員にとつての慰安日であることの意味をいつそう大きくする。それはいわば、組合員にかの講中組織にも似た部落民の寄り合いとして一種のたのしみを與えてくれる會合なのである。

第三に、「組合員の福利施設のあつせん」とは、たとえば、加配米・配給衣料品の受納分配あるいは、炭俵・繩・金錢のあつせん等々である。それは、官僚統制の仲介機關としての機能にほかならない。報奨物資と稱せられるものは、ここでは、組合役員の手をとおして、組合員の福利を増進するものとして手渡しされる。

第四に、「製法の研究」とは、一種の事前検査および報償制度である。すなわち製造された炭は營林署の検査を受けてその品質・量目の適否を決定されるのであるが、その検査の前に、一應組合内で品評會が催される。つまり、検査にとおらないような炭が出ることは組合の恥であるから、あらかじめ内部において品評會を

やることにより、一方においては「悪い炭」の發見に努めると共に、他方においては、品質も合格品でありかつ出炭の量の多い者に對しては、ほうびが出されるのである。「製法の研究」という言辭の中に、人は何か科學的な研究を豫想してはならないのであつて、このような品評會こそは、實は、部落民の共同體意識を媒介として生産者に對する強制力として作用するものである。部落民は、他の部落民の前で恥をかくことを恐れ、ほめられることを喜ぶのであつて、村人がいみじくも「これによつて能率があがる」ともらした如く、このような品評會によつて、日本型勤勲主義は知らずして溫存される。かくして、日本の官僚統制・供出機構が、末端におけるこのような基盤の上に、それを巧みに利用しつつ、「合理的な」勞働強化の強制においてその封建的搾取を貫徹してゆくことの一例證をこの現象の中にも見ることが出来る。

(4) 上に見た如き製炭組合の共同體的性格は、しかしながらこの内部に階級關係がないことを勿論意味するものではない。その共同的意識は、明確な階級的意識の成長を妨げはするけれども、そしてまた事實上久田組合においては階級分化は比較的に極論ではないけれども、そこには嚴然たる階級關係はなお賞かれる。

第一に、組合の役員たりうる第一の資格は、いうまでもなく、營林署の役人に顔のきく人間でなくてはならないということである。役人との交渉はむづかしいから誰にでもというわけにはゆかぬ。おたがいに顔を知りようになるとうまくゆく」と某役員の人

がまことに適切に述べたように、官僚統制はそれ自身民間ボスの發生を促す基盤であるといふことの眞實性はこどもも賞かれる。

第二に、役員はまた、拂い下げの代金を支拂う能力のある者でなければならぬ。さきにのべた如くその支拂いは直ちになさねばならないのであるが、それは炭を焼かない以前のことであるために、組合員はしばしばその支拂い能力を有しない。役員は、だから、通常は協同組合から、時として個人から借金せねばならない。彼は、村内においてそれをなしうるような地位なし顔をもつた者でなければならず、「やむをえないとき」にはひとまづ自分が責任を以て「たて、かえてやる」だけの覺悟と財産的餘裕を持つた人でなければならぬ。

こうして、組合の役員は、富農によつてではなければ、その任を果しえないことが當然に結論づけられる。だから、民主主義の今日でも、「役員だけは絶対に昔と變らないから駄目だ」といわれる位い、役員の地位は一部の有力者によつて獨占せられざるをえない。(因みに附言すれば、拂い下げ代金を支拂うさいには、ここにのべたように借金せざるをえないのであるが、もちろんそれは利子つきで返還しなければならぬものである。とくに個人から借りた場合にはその利率も小さくない。ところが、いうまでもなく政府が支拂う炭の代金には、そのような額は含まれていないから、利子を支拂つただけの損失額は、當然にかつ究極には直接生産者の負擔するところとなる。ここにも、封建的契約に由來する

官僚支配の不合理性は、生産者のごぜいにおいて、たしかに誰かに利益をあたえるであろう。

(5) こうして組合を支配する一部の富農は、絶対主義的な官僚支配に寄生しつつ、「役人」と組合員との間に立つて、たくみに上からの恩恵行爲を施しつつその支配を貫徹する。

たとえば、前にのべた如く、組合員が期限内に炭を焼ききれないときには、彼らは、自分たちに代つて役員の人に「延期の願いを」しに行つてくれるように「頼まなければならない。すなわち、「役員の手を煩わさなければ」自分の願望を貫徹しえない。また配給物資・報償物資も役員の手によつて適當に分けて貰わねばならないのである。なお生活に餘裕のない組合員は、政府の炭代金支拂い待つ餘裕がないときには、貨幣入手の必要に迫られて、炭を闇賣りしなければならない事情にしばしば追いこまれる。このような場合には、役員の人々がそれを買つてやつて、自分が製造した炭の俵數に追加する。これは、役員にとつては、第一にその組合員の困窮を救つてやる恩恵行爲であり、第二に、闇を防いで組合の出荷成績をあげる組合全體のためになる行爲であり、第三には、自分自身の出荷量を増加せしめることによつて個人的成績序列をあげ、かつ報償物資の分配に、より多くの權利を獲得しうる餘地を與える行爲である。このようにそれは、役員にとつては三重の利益を齎らす行爲であるが、それを好まない組合員も、「闇をするような不とどき者」と役員からおどかされれば、結局は役

員に買いあげて貰う以外に貨幣入手の道を絶たれてしまふわけである。近頃のように政府の支拂いがいちぢるしく遅れる場合には、彼らはますます役員に依存せざるをえなくなる。こうして組合員は役員に對して「頭があらなくなる」。彼らにとつて役員は行動を監視するような無謀な試みは考えもつかないように思われる。だから、かりに組合員が組合に納める手数料の總額が二萬圓あるとしても、その費用の使途を追求するような關心はいささかも存在しないのである。組合を支配する幹部たちの地位は安泰たらざるをえないであろう。こうして、彼らは、官僚支配の機構そのものの不合理性から来る間隙を利用して、上からの恩恵を媒介としつつその支配を貫徹するし、逆に、日本的官僚支配は、そのような基盤の上においてのみ、その矛盾を隠蔽しつつ絶対主義的支配をなお維持しうるのである。

(6) 結論的に言えば、私がこれらの現象をととして理解しえたことは、このような製炭組合の非民主的機構の中に、官僚支配の巧妙な「隠し田」が存在するということである。組合機構の民主化が、組合員の前近代の共同體意識を打破し、一部役員の恩情的支配のきづなを立ち切るとき、封建的契約をその法的基盤とする絶対主義的な官僚支配ないし統制は、そのよつてもつて立つ地盤を失われて、その矛盾をあらわに露呈するであろう。

(一) このような組合は、大字大久田には二つある。一つは下久田製炭組合であり、下久田、松久保、堀越の部落附近、

開拓團等を含む。その開拓團を除いてはこの組合員は比較的に貧農は少ない。他の一つは上大久田製炭組合であり、有實・西作等の部落を含む、ここには貧農もすくなくない。

(二) 新たに部落内に入つてきた者は、この場合、準組合員として過せられる。たとえば下久田の組合では正組合員三十五名のほかに、このような準組合員七名が存在する。

(三) もつとも、この點については下久田組合の場合には上大久田のそれに比べて、相對的に、總會の持つ意義は大きいようである。後者の場合には、總會で事を協議することはほとんど全くないといわれるのに對し、前者の場合は、時折あるといわれる。下久田組合においては、それだけ階級分化が少なく、したがつて、組合の機構も幾分かは民主化されているものと推定される。

(四) 拂いさげ代金が炭一俵につき二十五圓とし、平均各戸で四百俵製造するとすれば、その代金は一戸當で一萬圓の額に達する。

(五) 各農家の月別出炭成績表の中にも、そのことはうかがわれる。九月頃の間決算においては、役員たちの俵数は決して多くなく序列の下位にある。しかも、一月、二月という月は、普通の農家では、出炭量が急激に増加するが、役員のそれはほとんどふえない。ところが最後の決算において役員の出炭数はいちぢるしく増加して、一躍してその序列

をあげるのである。これは、最後の集計において他の組合員から買いあげた炭が追加されるからである。

(六) 私の推定した計算である、俵一俵につき一圓五十錢の手数料として、三十五名の組合員が、それぞれ四百俵を、つまり總計一萬四千俵を製造するとして、組合に入る金は、二萬圓前後となる。

IV その他

(1) 部落民は、製炭組合を道して國有林の原木拂い下げを受け、製炭に従事することについては今のべたとおりである。ところで、そのことは、國有林だけで彼らの需要を充たすに十分であるということ、かならずしも意味しない。第一に「拂い下げてくれる官の山に入るだけでは、一年間の炭焼きに足りない」場合があるし、第二に、その上、指定された山林そしてその内部で「くじ」により割り當てられた部分が「自分の家から遠かつたり地形が悪かつたりする」場合もしばしばある。このような事情のために、多かれ少かれ、農民はなお私有林に依存ざるをえないのである。この場合には、山林所有者と非所有者との間には、かなり決定的な分化が見られる。とくに有實・西作等非所有者の多い部落においてはそうである。恩恵と搾取とを通して非所有者は、所有者への隷屬を餘儀なくさせられる。營林署からは炭一俵につき二十五圓の價格で拂い下げられる原木を、彼らは私有林においては三十圓から三十五圓、ときとしては四十圓ほどの高價格

であがなければならぬ。その上、その賣買が成立までには、何回か懇願しなければならぬ。「生活に困るから賣つて貰ねばならない」という非所有者の意識、「賣りたくないけれど、頼まれたから仕方なく賣つてやるのだ」という所有者の意識、そこには恩情關係をよそほつたところの階級關係が嚴として貫かれる。

(2) 問題は、當然に燃料や草木の採取をめぐつての山林所有ないし使用關係の中にも潜在するであらう。しかし、遺憾ながら短期間の滞在においては、それを理解しうるまでに至らなかつた。

ただ採草ないし放牧のために農民は採草放牧地組合をつくり、これをととして國有林における利益權を獲得しているのであるが、その組合長が大字の區長であることから分るように、ここでも一部の富農がそれを支配しているようである。しかも、組合内部の割り當ては、ぐじによるのであるから、一見したところはきわめて平等であるかのように見えながら、實は山林所有者と非所有者との間ではその需要の規模がちがう筈だから、この形式的平等性の背後に實質的不平等が隠されていることは想像に難くない。

最後に、燃料の採取についていえば、國有林の枯枝や炭を焼いた後の裏本などによつて、農民はその需要をまかなつてゐる。もちろん、このような枯枝の採取は、法的には根據がないわけであり、ただ營林署によつて事實上また慣習上默認されているだけのものである。ここにも、「官の山のおかげ」を蒙つて生きねばならない農民の姿が浮びてゐるであらう。

(3) 官僚支配にボス支配との相互依存的からみ合いとが、上からの恩恵と共同體的意識とを利用しつつ、たくみに階級對立の顯在化を防いで、その封建的權力を貫徹するのが、今でもなお、こ

こでの實情であるかと思われる。いうまでもなく、この封建的部落機構を維持溫存せしめる權力の物的基礎は、それが國家であれ私人であれ、農民の死命を制する山林所有であることはうたがいない。しかしこのような停滯的機構の中に國家を思い營々として生きる、謹勉正直な農民意識は、果していつまでも安泰でありうるか。すでに山林解放の問題をめぐつて意見は全く對立し初めている。一部富農にとつては、國有林の拂い下げ、その私有林への轉化が常に願つてやまない希望だとすれば、このような拂い下げや、樹木の入札賣買が結局はそれら一部富農の手への集中獨占であることをはつきりしつてゐる人々は、國有林の拂い下げがではなく、自分たちの手によるその管理と、それと同時に、農地改革のような私有林解放こそが、ゆたかな生活を築きあげるいしづえであることを明瞭に知つてゐる。依然として、官や山主を恩人と思いつつも、自分の無力を意識し、各種團體や政治機關の幹部があい變らず一部富農やボスによつて獨占せられることに對する貧農の批判の叫びも存在しないわけではない。やがて、このような貧農の叫びが、この奥深い山村の一部落に擴がるとき、山林所有を基礎とする國家權力の封建的支配もまた崩れ去るであらう。

(本調査は昭和二十四年人文科學研究費助成金により、戒能通孝と民・主・義科學者協會法律部會の協同調査に成るものである。)